「知事との元気まるごとトーク」（令和 4 年 10 月 13 日開催）

「知事との元気まるごとトーク」は、知事と地域で元気に活動している団体等の皆さんが、青森県の未来を創るために直接意見交換をする場です。

令和4年度2回目の「知事との元気まるごとトーク」を令和4年 10 月 13 日（木）に「倉石コミュニティセンター」（五戸町）で開催しました。

当日は、三八地域県民局管内の4名の方にお集まりいただき、「三八地域で実現する仕事と子育ての両立～移住後の経験から～」をテーマに意見交換を行いました。

当日の概要をお知らせします。

当日の出席者

農家民宿カフェ音水小屋・ふるさとの家保存会	代表	佐藤 美穂子さん
タナカファーム	代表	田中 広大さん
合同会社南部どき・NPO 法人学びどき	代表社員・理事長	根市 大樹さん
Design U	代表	西村 裕子さん

（知事）

皆さん、こんにちは。

今日は、佐藤さんが保存活動に携わっているふるさとの家を見せていただいて、６０年ぐらい前のことを思い出しながら、先ほど一緒にいた元オーナーの方とも盛り上がって、昔の話をしてきました。

本当にああいう暮らしがあったんだなとか、あれまだ残っていたとか。うちでも、まだ薪を使っていますが、いにしえのもの、大地とともに生きていた青森の南部の地域がここに残っていて、いろいろなことを思い出しました。そんな当時のことを思い出しながら、今日、この会場にお邪魔させていただきました。

さて、知事との元気まるごとトークということで、今の課題について意見交換をさせていただきます。「今を変えれば未来は変わる」ということを、健康づくりでも言っていますが、今まさに青森に生きている、その中において様々感じていること、また、こうあったらいいなということ、あるいは、将来に向かってのテーマ等々ですね。今日は赤ちゃんも来てくれていますが、赤ちゃんのために、青森のきちんとした方向性をつくっていくこと、それは、まさに今だと思っています。今があっての未来ですので、今日はそういったことについて、皆さんが思っていることをいろいろと言っていただきたいと思います。

他に、小中高を対象に地域懇談という形で、アイデアをいただいていまして、出てきたアイデ

アを予算化したりといったこともやっております。

本日は、具体の生業、生活している皆様方とこうしてお話できるということで、とても大事だと思っています。

なおかつ今日は、県政を具体に動かしている県庁のチームの職員が来てくれています。そのチームの一人ひとりが皆さんからいただいたお話に対してお答えするのですが、自分たちがそれを行政に生かしていく、そういう仕組みの中で、今日、集まってもらっています。もうかれこれ１９年、こういうことをやっています。限られた時間ではありますが、どうぞよろしくお願いいたします。お世話になります。

（三八地域県民局長）

それでは、私から、本日の意見交換のテーマ「三八地域で実現する仕事と子育ての両立」というテーマを選んだ理由などについて、簡単に御説明させていただきます。

三八地域だけに限らないんですけども、少子高齢化や人口減少が急速に進行している中で、特にこの地方において、労働力の減少や、公共交通機関の撤退、地域コミュニティ活動の停滞といったような様々な課題が出てきていると認識しております。

一方で、いわゆるコロナ禍によって、リモートワークなど、多様な働き方が広がり、あるいは、地方での暮らしに対する関心が広がってきたといった変化もあると考えております。

こうした機会を捉えて、自然環境や子育て環境に恵まれた本県での仕事、それから暮らしの魅力を、これまで以上により効果的に情報発信することができれば、問題になっております若者の県内定着や、ＵＩＪターンを一層促進できる絶好のチャンスなのではないかと考えているところです。

そういったところから、本日は、県外で生活された経験をお持ちの佐藤さん、田中さん、根市さん、それから西村さんから、ここ三八地域に移住されてから行っている活動をまず御紹介していただくとともに、この地域で子育てしながら暮らしていく上での問題点、悩み、地域の課題、あるいは県に期待することなどをお話していただいて、今後、県として取り組むべきより効果的な施策に繋げていけたらと考えているところです。

どうぞよろしくお願いいたします。

（佐藤美穂子氏）

私は、現在、この近くの倉石地域で農家民宿カフェ音水小屋を営んでおります。ふるさとの家という築２００年の古民家も仲間と共に維持管理しており、毎週土曜日、一般開放しておりまして、現在は、日曜日もイベントを時々やっております。

私は、６年前に東京から移住して来ました。夫と子ども２人を連れて来ました。現在、一番下の女の子が３歳で、小学校１年生、３年生と３人の子育てをしております。

私が青森に来て思ったことは、集落の維持の活動が凄く多いなということです。私は、田舎でのんびりと自分のやりたいことをと思う反面、やっぱり地域って自分たちの力、自分たちの手で作っていくことが大事なんだというのを初めて知りました。

私は、大阪で生まれ育っているので、田舎暮らしって全然知らずにこっちに来ています。草刈りもやったことがない人間だったので、草、とらなあかんの？とびっくりしたし、草生えていたら汚いとかって言われるのも、最初、何を言っているのか全然よく分からなかった状態で、今でも草刈りをちょっとさぼりながら、ぼちぼちやっています。

そういった地域活動が凄く多くて、子どもの習い事の送迎の時なども、ちょっと大変なことが多々あると感じています。田舎暮らしというと、最近流行っていると言われていますが、もうちょっと地域活動にこういうことがあるよ、というのをちゃんと伝えていかなあかんのかなというのに気付かされつつあるこの頃です。

もう少し、地域の活動にいろんな人が関われるようになると、変わってくるのかなと思っていまして、例えば、地域のことは地域で守るということは、頭では分かっていても、どんどん人が減ってきているので、何か行事がある時に地域外の人も一緒に草刈りに参加して、一緒にお茶飲んだり、一緒に食べたりといった時間があってもいいのではないかと思っています。ここの地域も高齢化が凄く進んでいて、もう少しいろんな人を巻き込んでやっていったら楽しくなるんじゃないかなというのを日々感じております。

課題といえば、児童クラブのお金がちょっと高いなと感じています。今、うちでは月２，５００円で２人で合わせると、月５，０００円の出費がしんどいなって思う時があります。子どもたちの長期休みや、急に早く帰って来る日があると、やっぱり仕事を無理やり早く止めて迎えに行かなくちゃいけない。うちでは、子供がバス通学をしているので、バス停まで迎えに行っています。

もう少し児童クラブを柔軟に使えるようになればいいなと常々思っておりました。

（知事）

ありがとうございます。

佐藤さんの言っていることが、身に染みて分かります。元町長ですから。３０年ぐらい前、町長をやっていましたが、ちょうどジャスコができて、人口が増えたりということがありました。

役場の立場で考えると、人口が一定だといろんなことに対応できるなと思います。今は圧倒的高齢化ですが、その当時はまだそれほどではなかったものですから、地域の人、集落の人たちが集落を維持するために人を出して皆でいろいろやることができたんです。

本当に急激に高齢化が進んで、そういった中で水路、泥上げやらなきゃいけないとか、草、刈らなきゃいけないとか人手が足りない状況です。

かつては、役場も手伝いながらやってきていましたが、今本当に人手がないと実感しています。

本当に人が減って、後期高齢者が多くなってきていますので、こういったことを心配する時代になってきているんですね。

大阪からおいでになって、はじめは田舎暮らしはゆったりとしたものだというお気持ちもあったのではないかと思います。でも雑草があると困るんですよ。虫湧くし。

今日はふるさとの家で、元住んでいた方々もいらして、昔話をして盛り上がって、この家、足元が寒かったねって話をしました。子どもの時は寒くて、とにかく下から冷えるわけです。

だから、移住のＵＩＪターンのイベント等を東京でやる時に、リノベーションチームも一緒に行って、移住相談をすることにしています。

でも、人がいないと集落維持していけないので、そこが実際の悩みです。

今は、地域経営体という形で田んぼをやれるようになったので、それぞれ農業も一緒にやるとか、グループを組ませていろいろやっているんですけども、それでも絶対に人手は足りなくなるので、佐藤さんたちみたいに、若い人が来ると、皆、喜ぶんですよ。

自分自身は、ずっと攻めの農林水産業をやってきましたが、その根幹は集落だと思っています。

戦後、満州等から引き揚げてきた人たちのために開拓したところは一気に廃れてきています。土地や人も集めて、本集落、ゆりかごを残したい。ゆりかごとは何かといったら、食料をそこで作り、赤ちゃんを育み、神社があってそこでお祭りもあって。食と命と文化のゆりかごである集落、本村を残していこうというのを一生懸命提唱して、攻めの農林水産業をやって、所得だけは２倍に伸びたんですけども、所得が伸びても、なかなか人手が足りない状況です。これまで３００名近く、ＵＩＪターンで若い農業者が帰って来てくれていますが、経済を考えたら足りないですからね。地域だけで３００位あるわけですから。りんご地帯は、結構、帰って来る人が多いんですが。

こういった状況で、青森県においでになって、いろいろカルチャーショックを受けたと思うんですが、本当に私が町長をやっていた頃は、何とか回っていたんですよ。これからどうやって、地域として高齢の方々を支えていくか。地域共生という話で、移動の問題、どうやってバスを出してもらうかとか。病院との接続や買い物ができないと一人暮らしだと大変なので、道の駅の取組で道の駅に物を出す、出すのも農福連携で障害者の方々に出してもらったりといったことをやっています。黒石は農福連携の大先進地で、最初から活動してくれた人がいて、集めて出す、出す時にお弁当やお惣菜を持ってくるとかという取組がありました。そういうパターンを今、県内のあちこちでチャレンジしています。でも実際は、あまりにも急激に人口減少が進んでいます。高齢化の中でも団塊の世代が、８０代ぐらいまでは大丈夫だと思うんですけど。従って、正味あと１０年でいろんなパターン、確実に５、６年で地域共生パターンを作らないと、本当、一気に崩壊するか、皆、街の真ん中に来て住んで、通いで農家をやってくれっていうふうにならないために、総力戦で対応していました。

それで、集落維持の関係や、子育て関係のことなど、我々、県として応援できることはないかということで、こどもみらい課と県民生活文化課と生涯学習課が来ていますので、それぞれお願いします。

（こどもみらい課）

佐藤さんから、今、お話がありました放課後児童クラブの運営、利用料の件についてお答えします。放課後児童クラブは、小学校１年生から６年生までの子どもさんを対象としています。

今日、この会場に入って来ましたら、この中にも倉石地区の放課後児童クラブがあるようですね。利用料は、どうしても人件費がかかりますので、原則として、半分を利用料で半分は国、県、市町村で、３分の１ずつ負担するという仕組みとなっています。

実際に令和３年度の利用料を調べてみました。一部の市町村では、無料というところも若干はございます。ただ、やはり人件費や、電気・ガス・水道などの管理費もかかりますので、大体２，０００円以上４，０００円未満のところが多く、大まかには３，０００円前後というのが一般的

になっています。

ただ、五戸町さんの場合も調べてみましたら、先ほどお話があったとおり２，５００円ということだったのですが、昔から保育所もそうなんですけども、子どもさんが２人、３人となると、例えば、２人目を半額にするとか、３人目は無料とか。そういったことについては、市町村に対して働きかけをしているところです。

それから、事前にいただいた中で放課後児童クラブの利用が夏休みとか冬休みだけでも利用したいというようなお話がありました。放課後児童クラブは、基本的には、年度はじめに一旦、事前に登録をすることになっています。ただ、実際の利用は、登録しても、例えばですけど、１日も来ないということも可能です。

ですから、夏休み、冬休みなど、直前になってから利用したいという場合も、役場の方に御相談いただければ、利用できるということになっておりますし、五戸町さんに実際確認したら、可能とのお返事がありました。

それから３つ目の、夏休み、冬休みのお弁当のことですが、今は食中毒などが多く厳しくなったので、基本はお弁当を持参していただくことにしているんですけども、実際に五戸町役場に確認したところ、もしも一定の需要があるのであれば、そこは、対応したいということで、保護者の方と運営主体の方と、いろいろお話をしていただいて、今後、検討したいというふうに回答をいただきました。

詳細については、役場に遠慮なく御相談いただければと思います。

それから、事前に、子育てサポーターとかヘルパーというようなお話もありましたが、五戸町も含めた八戸圏域は、いろいろな事業をまとめてやっておりますので、八戸市近辺の方であれば、ファミリーサポートセンター、俗に「ファミサポ」と言っていますけども、子どもを預かってもいいですよという方と、子どもを預かっていただきたいという親御さんを事前にマッチングしまして、それで、例えば、子どもの送迎や家事等の手伝い、ベビーシッターも含めて、ということもありますので、ちょっとお金がかかります。有料ですけども、八戸では、「ファミサポ」というものをやっておりますので、これについても、もし利用したいなどのご希望がありましたら、役場に御相談いただきたいと思います。

（知事）

役場にもきちんと伝わったみたいですので、御提言いただいて良かったんじゃないかと思います。

（県民生活文化課）

佐藤さんから、集落の維持活動や、草刈りの支援というようなお話を頂戴しました。直接、集落の維持活動というものを担当している県の窓口はないのですが、県民の皆さんが広く、奉仕活動に親しみ、身近なものとして広まって欲しいということを考えておりまして、県では、平成１０年に青森県ボランティア活動等の環境整備に関する条例を制定しています。

条例制定後、ボランティア、ＮＰＯ活動の情報を提供する情報誌の発行、ボランティア活動費の助成、県と協働を希望するＮＰＯ法人とのマッチングなど、活動の現場となる市町村とも協力し合いながら、そのような環境の整備に努めてきたところです。

平成３０年度からは、仕事を通じて培った知識や経験、スキル等を活かしたプロボノ活動、プ

ロボノですね。これを県でも推進していこうということで、「あおもりプロボノチャレンジ」に重点的に取り組んでいます。

「あおもりプロボノチャレンジ」の具体的な支援としましては、支援をして欲しいという団体と支援をしたいというスキルを持ったプロボノを結び付けるような部分を県が行い、プロボノの皆さんには、団体さんが支援して欲しいという活動、具体的には、ホームページやリーフレット、イベントの運営マニュアルの作成、というような御要望がありますが、これらをプロボノの皆さんに支援してもらっています。

今後ともボランティア、ＮＰＯ活動が継続していけるよう、プロボノ活動の推進などに引き続き取り組んで参りたいと思っています。

（知事）

結構、雪かき従事群とかいろいろやっている人がいたり、草刈り従事群もあればいいんですけど。でも、意外と草刈り好きな人って多いですから。人のために何かやってみたいって方達、結構多いですよ。

そういう部分とどう連携させていくかというのが、我々の仕事だと思っています。

何かアイデアがあれば教えてもらえればと思います。

昔は草刈り選手権とかやっていた。

（構造政策課）

知事が先ほど発言されたとおり、地域経営という集落営農組織、農業生産活動が主な活動なんですが、地域貢献活動も行っていこうということで、生活道の除雪や、公営サロンの設置、そういった地域貢献活動も行っていく組織に育てあげようということで、農家だけでなく、一般の住民の方も巻き込んだ活動に発展しているところも多くなってきております。

また、県の施策以外にも、中山間の直接支払いや、国の多面的機能に対する交付金、これを上手く活用して、農家以外に集落のサラリーマンですとか、そういった方も巻き込んで共同活動、草刈り活動などを行っている集落も沢山ございますので、そういった事例をどんどん発信していきたいと考えております。

（知事）

りんご地帯でも、葉っぱを取ったり、りんごもぎする人が足りないっていったら、この間もテレビに出ていましたが、青森にプライベートで来たＪＡＬの職員がりんご畑でもぎ取りするというようなことがありました。

ある企業では、農家出身者が一杯いて、休日に人手の足りない青森の農家を手伝いに行こうとか、そういう付き合いのある企業の方々が、今、お手伝いをしてくれるケースが出てきています。どうマッチングするか、整理整頓するかというのが、なかなか上手くはいっていないですけれども、個別にはそういうことが始まってきています。

倉石は、昔からチームワークが良いところなので。

良いところに来られたと私は思います。いろいろな意味で、トータルとすれば暮らしやすいと思っていますので、御意見、御提言いただければと思う次第でございます。

（生涯学習課）

事前にいただいていた御意見に、高校生などの若者と集落の方々が一緒に、草刈りを行ったりしながら、地域理解、地域貢献に繋がるような仕組みがあるといいよねということがありました。

県教育委員会では、地域の若者と大人が交流する機会が不足していることや、若者の自己有用感を高めたり、地域愛を育んだりするための活動が十分に行われていないことなどを踏まえて、高校生などの若者が地域で活躍する、地域活動者の手法を学び、それを手本として、主体的に地域活動の企画・実践を行う、地域の想いを繋ぐ若者育成事業を実施しています。

今年度は、県内１２の地域活動団体に本事業を委託しており、具体的には、地域の良さなどを発信する動画制作や清掃活動を通じた「まち歩き」、普段接することのない地域の大人との交流会及び地域の食材を使った新たな商品開発など、各地域の実態に応じた活動が行われております。

県教育委員会では、今後も各地域で活躍する地域活動者の地域活動団体と連携しながら、次代の地域を担う若者の育成に取り組んでいきたいと考えております。

（知事）

バスで私学に通っている人も多いから、そっちとも連携できればいいなと思います。

そういう公立、私立を超えた連携で、是非、子どもたちにふるさとをいろいろ知ってもらいたいので、局長から御意見があれば。

（三八地域県民局長）

今、知事からお話があった通学バスもそうですけども、今までそれ専用にしか使っていないものを他のことにも使っていくことが、バスに限らず様々あると思うので、行政縦割りと言われていますけれど、その縦割りを、どうやれば打破できるのか難しい話ですが、そういう方向で考えていければいいのかなと思っています。

（知事）

いただいた意見は持ち帰って、しっかりと活用します。

（田中広大氏）

私は、専業農家で、今はビニールハウスでミニトマト、冬場は寒締めホウレンソウを育てています。

新規就農３年目で、１年研修もあって、その前の年に来たので、青森に帰ってきて５年目ぐらいです。

私も大学は県外に出まして、遥か遠くの鳥取県の鳥取大学というところに行きました。そこの地域学部という、元々教育学部が名前を変えた学部に行きまして、地域づくりとか、全般をやっています。

元々教育学部ということもあって、教員免許を取得しました。更新はしていないので、多分、来年か再来年で失効するかと思いますが、まだ中高の社会科の教員免許を持っています。

大学時代は、いろいろやっていましたが、途中１年、大学を休みまして、仲間とシェアハウス

とゲストハウスを立ち上げました。自分たちで旧国鉄寮を買ってセルフリノベーションをして、現代アートなどの人たちも巻き込んで、ビジネスとしてやっていました。そのシェアハウスに１年間、間借りして生活していましたが、やっぱり農業に興味があったのか、近くで養蜂のアルバイトがあって、そこで養蜂をやりました。また、海外にも行きたかったので、バックパッカーをしようと思ったのですが、お金が全然足りなくて、クラウドファンディングとかもしました。ただ、クラウドファンディングって、胴元が３割ぐらい取るんですよ。なので、こういう気持ちで行きたいんですって、郵貯と地元の銀行の口座番号を書いて、自分でヤフーメールを送っていました。そうしたら一人、面白がってくれる人がいて、お金を出してくれて、タイとミャンマーに１か月行ってきました。

青森に来てからは、化学肥料等を使わずに有機質肥料、ぼかし肥料などを使って農業をやっています。県民局さん等にも御協力いただき、ファーマーズマルシェの実行委員会にも入って、先日、八戸市のマチニワでファーマーズマルシェを開催することができました。

ごちゃまぜひろばは、男女共同参画センターさんがやられているセミナーにうちの奥さんが参加しまして、そこで知り合った気の合う人たちと集まって、今度、南部町で役場の前の芝生があるんですけど、そこを使って子育て応援みたいなことを、ゆくゆくは、食育なんかも絡めて、これからやろうかなというところです。

（知事）

是非やってください。

（田中広大氏）

以前、鳥取県に住んでいまして、鳥取県も子育て王国と謳って、凄く頑張っているんですよ。僕は湯梨浜町というところに住んでいましたが、そこの家庭子育て支援事業、家で子どもの面倒みているお母さんたちにお金を給付しますよという仕組みなんですが、家で子どもをみることって、なかなか評価されないんですよね。本当は、子どもが小さいうちに、お母さんと子どもとの関係性を作る保育的な意味でも、凄い価値があって重要だと思うんですが、そこにちゃんと子育てに対する対価としてちゃんと月３万円、子どもが２歳になるまで支給するといった制度があります。要は、専業主婦状態でやっているお母さんに対して支給する仕組みです。

子どもが小さいのに預けながら頑張ってバイトに行ってる方もいると思いますが、田舎だと時給が安いので、結構、３万円って大きいんですよ。家での子育てに肯定的な支給があると、お母さんたちも心強いと思います。

丁度、今日きている赤ん坊が３人目なんですけど、この子は青森で生まれた子どもで、１人目、２人目の頃は僕たち貰っていましたので。こういった制度が青森県も欲しいなと思います。

財源が国からなのか県からなのか、町独自とか、分からないのですが。

（知事）

人口規模が小さいほど、実はやり繰りができたりして。小さいところほど、いろいろと無料でできることもあると思います。

（田中広大氏）
湯梨浜町というところが、田舎だけど、そういう取組に力を入れていて、鳥取県内の中でも人口流入が増えていて、人口が増えている町。そこらへん、凄い力を入れているところではあるので、全国をみても先進的な取組だと思います。本当に子どもが一杯いて活気があって。
南部町でも、そういう面では頑張っていただいて。

（三村知事）
先進的な町だからね。

（田中広大氏）
スピーディなんです、南部町は。凄いありがたいです。
先ほども送り迎えの問題があったんですけど、田舎の子育て、やっぱり送り迎え地獄なところがありまして、僕が思うのは、私立の学校でやっているんですけど、放課後に学校の中で習い事、有償でできますよと。県立になると、お金を取るのはまずいですとなると思うんですけど。親が送り迎え疲れしてしまうので、そういう仕組みがあったらいいなと思っています。
あとは、南部町とか八戸市近辺でいうと、公園が馬淵川近辺にあるので、すぐ使えなくなったりとか、トイレがある公園。
その点、県南の人は、結構、岩手の子どもの家等によく行くんですけど、そういうところがあるといいよなっていうのと、やっぱり、Ｕターン、Ｉターンとかの人材にもっと注力していただけると、いいかなと思います。

（知事）
ありがとう。
凄く、今日、役に立つ話をたくさん言ってくれました。湯梨浜町のお話は、どこかいろんなことをやってくれそうな町長さんにこういった方法があるらしいとサジェッションできるかもしれない。
本当によく帰って来てくれて、なおかつ、ミニトマトと寒締めホウレンソウ、どちらも、自分で言うのもなんだけど、一番セールスして歩いているから。健康づくりはミニトマトって、あと１日５個、ミニトマトを食べましょうってね。
寒締めを出した頃、甘くて美味くてさ、冬場もあれで、県南はあれで稼げるからね。雪でハウス潰れないしね。
ただ、新規就農の人たち、凄い、今、苦しいところがあってね、国の制度が無くなるので県の方で支えるというような仕組みも農林水産部が次々考えてやってくれています。

（こどもみらい課）
まず、県の取組なんですけども、いわゆる未就園児と呼ばれる、自営業の方など自宅でお子さんを面倒みていらっしゃる方、まだ県内でもいらっしゃいますが、現状保育所や幼稚園に入っている子どもさんが殆どになっています。ただ、毎日、保育所等に来ないで、週１回とか２回、子どもだけ遊びに来たり、お子さんと一緒に遊びに来たりといったこともできます。
それから、今日、何か買い物に行くとか、ちょっと病院に行くとか、そういうことで、どなた

も子どもさんをみることができない時には、一時預かりという制度もございます。

ですので、何か困った時とか、いわゆるリフレッシュですね。いろんなことをやられて疲れた時とか、自由に一時預かりという制度も使えますので、町等にも一度御相談いただければと思います。

それから、先ほどの３万円のお話なんですけども、実際、今回、湯梨浜町さんにこちらから確認をしてみました。それで、湯梨浜町、名前のとおり、お湯と二十世紀梨と、それから浜が、砂丘があって、昔、ここに羽合町というところがあって、スイカの名産地だったということで、私、昔、行ったことがあるんですけども。そこに聞きましたら、保育所等に入ると、大体０歳児であれば、月１５万ぐらいお金がかかるそうです。一番かかるのが人件費で、他は建物の管理費等になります。

ということからすると、３万円というのも、安いといえば安いというようなこともあるため、町でいろいろ考えた末に満２歳まで、３歳になる前まで、この手当を支給するという制度を作ったと聞いております。

満３歳以降になると、保育所等も無償化されますので、幼稚園だと満３歳になった時から、保育所だと、満３歳になった翌年度から保育料が無料になりますので、そういったことがあるので、一応、２歳までという設定にされているということです。

この事例は非常に参考になるんですが、ただ、これに子どもの数を実際かけていくと、毎月、毎月となると、大きな金額になるものですから、これについては、こういう方法もあるということで、参考にしていきたいと思います。

（知事）

小さいところは意外とやれる。それで、若い人たちが来てくれたりとか、何とかバランスがとれるんだけど。ちょっと規模が大きくなると、さすがに。

（こどもみらい課）

それで、１点だけ補足なんですが。毎月、このお金を払うというのはなかなか難しいんですが、今、物価高騰で、電気・ガス・水道、それから給食費、食材費も全部上がっているということで、県では、今回、１回だけなんですけど、児童手当をもらっている方、一部の高額所得者の方はもらえないんですが、子ども一人当たり、たった１回だけなんですけど、２５，０００円、子ども一人当たり、１８歳までの子どもさんに、２５，０００円を給付するということで、各市町村にお願いをしまして、１０月以降、その手続きに入るというふうに聞いておりますので、それぞれ、お住まいの自治体からまた御案内があると思いますので、そちらの方を活用していただきたいなと思います。情報提供でした。

（知事）

１回だけだけど、思い切りました。

（こどもみらい課）

計算したところ、ざっくり４２億になります。こどもみらい課としては、こういった取組をやりましたということを情報提供させていただきたいと思います。

（都市計画課）
田中様からいただいた御提案で、公園の整備というのがありました。公園というのは、例えば、お住まいになっている南部町で、どういう「まち」を将来作っていくかという計画の１つになります。なので、公園を整備するというのは、基本的には、町でどういう位置に、人口規模等を考えて、どういう公園を作るのかというのを、まず絵を描くことになります。
それについて、計画を作っていった際に、我々の方で、例えば、南部町から、近隣の八戸市も同じなんですけども、こういう公園が欲しいとか、こういう整備をしたいという相談があった場合には、我々は助言をしたり、こういう手法で整備をすればいいんじゃないかなっていうことになっています。
ただ、こう言っても、皆さん、公園を町で作るのか、県で作るのかよく分からないと思いますので、参考までにお話させていただきますと、県で作っているのは、青森市内にある三内丸山遺跡とか、美術館がある総合運動公園等になります。それから、新総合運動公園という、青森市の東側にある運動公園があるんですけど、そのような大規模な、広域公園という広い公園を作って管理しております。
今、お話があった「まち」の中でトイレがあって休めるような公園というのは、基本的に地元の自治体が整備をするという仕組みになっていますが、今回のお話については、昨今ですと、八戸市も、公園を集約したり、また、新しく遊具を整備したりと、そういう取組もされておりますので、南部町とか、八戸市にも、今回のお話は情報提供させていただいて、良い方向にできればなと考えております。

（知事）
トイレ作るのはどうか。

（都市計画課）
トイレも、公園の中の施設ですので、公園と一体に作ることは可能です。
公園は、大きいところでは駐車場があったり広場があったり、もう少し大きいところは野球場があります。今回お話があったということを南部町や八戸市に、そういう御要望がありましたよということでお伝えしながら、我々も連携していきたいと思っております。

（地域活力振興課）
事前にいただいた話の中で、外の世界から俯瞰的に地元を見ることで気付く魅力があるということで、発信していく人材の確保等を期待したいというお話がありました。
田中さんがおっしゃるとおり、外からの評価を受けて、青森県の素晴らしさに気づくということは、本当にあると思います。
県民の県に対する評価が低いというアンケートがありまして、県民は、青森県のことを何もない、暗いと思っているのですが、実は首都圏にいる方たちは、青森県民のことをそう思っていないんだよと、そこのギャップがあるというアンケートも出ております。
そういったことも含めて、大学生や高校生、若い方たちに価値観の幅を広げていただきたいということもあって、先日、青森中央学院大学の学生さんに、根市さんに講師になっていただいて、八戸市の魅力を探るツアーをやりました。

実は、佐藤さんにも、八戸学院大学に講師になっていただいて、お話をしていただいております。

私たちとしては、青森県、何もないと嘆く人ではなくて、何もないんだったら、何かやろうというふうに自分たちでステージを作っていくというような県民が増えたら、と思っておりまして、そういう意味で、立志挑戦塾とか、リーダー養成塾とか、そういった塾の活動もしております。

ただ養成するだけではなくて、その方たちが、また次の世代の若い方たちを育てていく。青森県は面白い魅力がある、可能性があるというふうなことで、人が人を育てて、それがまた、次の人を呼び込む、外からも呼び込むというふうな仕組みづくりを一生懸命、今、やっているところでございます。

（知事）

我々も高校の同期会をやると、東京都に住んでいる人が多いという変な状況になります。離れている人の方が青森の良さにいろいろ気がついてくれて。

何を言いたいかというと、青森で育った子どもたちが、青森のことを意外と知らないまま高校まで行ってしまうところがある訳です。いいところなのか、悪いところなのかよく分からないっていう状況があったので、どうやって故郷のことを再評価してもらうか。

コロナが終わったらどこに来たいって、例えば、台湾では青森県が、やっぱり良いところだって言うわけです。

地元の子どもたちがもっと気がつかなきゃいけないと思っています。高校生たちが自分たちで発見するという活動を、今、やっています。いろいろ頑張っています。

（根市大樹氏）

改めまして根市です。よろしくお願いします。

僕も戻ってきた当初、ＮＰＯ法人達者村１期の事務局を務めさせていただいて、その後、起業しました。

今は「合同会社南部どき」と「ＮＰＯ法人学びどき」という２つの経営、運営をしております。

南部どきは、地域の農家さんの困りごと解決というのをメインにしていて、剪定枝を地域の農家さんから集めて、その剪定枝のチップで燻製を作って販売しているようなことをやっています。

今日のテーマは働くことと子育てなので、学びどきの方がメインになります。

学びどきは、去年の４月から始めているのですが、地域の子どもたちを集めて寺子屋型で、いわゆる学習塾ではなくて、体験型の塾をしています。地域の農家さんのところで農業体験をしたり、地域の定年退職した先生などを講師にして勉強を教えたり、あとは、習い事、オカリナやギター、料理などを教えてもらっています。

現在、１２名子どもたちがいて、放課後、学童に行った後に通ってきて、６時半から７時くらいまで、何かしら学びどきの中で体験しています。

僕自身は、３人子どもがいるんですけども、本当に南部町は子育て支援がしっかりしているので、ある意味、本当に、産みやすいというか、育てやすいところもあったので、更にそこに教育

がもうちょっと充実していれば、もっと良い町になるかなと思って、民間でできる教育ということで活動しています。

（知事）
いわゆる学習塾じゃなくて、生きる楽しみの塾というか。

（根市大樹氏）
そうですね。そういったもの。

（三村知事）
いろんな楽しさを知る塾。

（根市大樹氏）
そうです、そうです。
子育てが充実しているので、あまり子育ての悩みはないんですけれども、自分は自営業というか、経営者なので、自分の休みを都合つけて子どもの行事にも行けますし、熱があったら帰れたりするので、僕は比較的恵まれている。勿論、そうじゃない人たちも沢山いるので、そういう方が、この学びどきというところを利用していただいていて、１２名のうちの半分以上、シングルの方が子どもを預けています。そういう方々と話をしていると、佐藤さんや田中さんもおっしゃっていた、例えば、送迎の問題。学校が終わってから、今は学童が近くにあるので、歩いて移動したりしていますが、南部町は、合併、統廃合しまして、学童が遠くなるところもあります。そういう中で、学童までの移動だとか、あとは事前にも書かせていただいた、部活動ですね。地域移管している中で、送迎などが、お父さん、お母さんの仕事になってしまうので、どうしても７時までにシフトを抜けられない人は、部活動に入りませんという子がいて、そういう方が、結構、この学びどきに来て体験をしてくれています。
学びどきの中では、さっき言った体験で、地域の人たちが先生になるというのもあるんですけど、全国２１か所が拠点と結んで、南は与論島、北は北海道までの学校と結んで。

（知事）
Ｗｅｂで交流。

（根市大樹氏）
はい、Ｗｅｂで交流して、オンライン部活のような、オセロをやったり、将棋を指したり、そういったのも、今、やっています。
できれば、こういった活動を広げていきたいんですけども、今、実際、チラシの中に料金を記載しているんですが、ほぼこの料金をいただかずに通ってもらっていました。
やはり、この料金を、シングルの方が払うというのは難しいので、そこは、しょうがないということで、今、持ち出しでやっています。なかなか稼げないので、ＮＰＯにして、日本財団さんに補助金の申請をしたり、何とかこれを継続させているような状況です。
でも、持続あるものにするには、どこかでビジネスにしていかなければいけないので、そこは、

考えているところです。現在、スポンサーの企業様が４０社ぐらいあって、少しずつお金を出してくれたり、物資の提供、それから子ども食堂の食材提供などもしてくれているので、こういったものの認定をＮＰＯでとりながら、将来的には地域で運営するような拠点にしていきたいと考えていました。

地域の人たちが先生になるというのが凄くよくて、２、３年前に県の地域共生社会の事業を三戸駅前でやらせていただいた時に、何回かオブザーバーとして、私も出させていただきましたが、世代間交流をしたいという高齢者や地域の方が多かったんです。それが、今、実現できたことで、生きがいが出てきたり、近所の人、知らない人同士だったのが、今は知っている人になって、挨拶できたりという関係性がちょっとずつできているので、それは、今、凄く大事なことなのかなと思って、何とか続けていきたいなと思っています。

あとは、いわゆる、貧困層やシングルの方の子どもさんたちの支援、例えば、行政でできない、送迎も責任がつきまとう部分なので、結というか、地域の関係性の中でお父さん、お母さんと関係性を持ってやっていくようなことを、今、やりたいなと思っていました。

やっぱり、昔の近所付き合いみたいなものは、今、人が少なくなっているので大事だと思っているので、それを意図的に作っていくということを考えながらやっています。

あとは、是非、青森県は一次産業もそうですし、自然が豊富なので、こういった体験型、探求型の学びというものは、どんどん県内に広がっていければいいなと思っていました。

私からは以上です。よろしくお願いします。

（知事）

ありがとう。

青森県型の地域共生ですね。最初に話したとおり、町長出身なんだけど、役場の兵力は、人口と共に減らされて、もう集落の面倒、それぞれが担当して見ていくことができない、どうしていくんだということで、地域共生という概念を出して準備していたら、国もやるということになって。

町村に、１０年かかって理解してもらえて、今、地域形態の地域共生という形でやっています。そうしているところにコロナが直撃し、集う、集まるが一切駄目になったけれども、起死回生のｅ-スポーツ、高校生と高齢者の勝負などやっています。

我々も、地域で可能な形を取りながら、そこにＮＰＯなど、皆に応援をしてもらいながら、とにかく生き延びる、生き残るというか、農業の方は、知ってのとおり、今のところは売り先も確保してあるし、金はちゃんと払ってもらえるし、何とかいけているんだけども、生産できる人口がゴソッと抜けたらどうするかというところ。今月の補正予算で、トータルで２４億、設備投資して、更新して頑張りたいというのに応えてます。

こんなふうに、我々は、働く意欲があって、稼ぎたい意欲があって、経済を集めてくれる、それを中核にして、地域形態を中核にした、地域共生を残そうとしています。

ただ、その中でどうしても、なかなか手が回らない部分があります。

根市さんがやってくれているような仕組みっていうのは、本当にありがたい。

昔からあったけど、部活動の送迎問題とか、なかなか、これから学校単位でできなくなるので、その辺、大変だと思っています。

我々がどうしても手を付けれないでいたところをこうしてやってくれてありがたく思ってい

ます。
　今日出た話について、スポーツ健康課とこどもみらい課から、それぞれ話をお願いします。

（スポーツ健康課）
　部活動の問題につきましては、実際に、今、お話があったように、地域でも子どもたちが少なくなってきているので、当課としては、子どもたちが安心してスポーツに親しむことができる機会を確保することを目的に進めています。
　小学校については、今、社会体育への移行が進んでいて、その中で送迎などの問題が出てきているのですが、それについては、今、お話があったような、地域の中で送迎を賄えるような形を作っていただいていることに、感謝します。
　あとは、指導者についても、地域の人材を活用するということは、非常に良いことで、その事例を県の方に紹介していただければと思っていました。
　中学校の部活動は、今、国でも地域に移行するということで動き出したところで、まだ実践事例が少ないので、県でも、国の動向を踏まえながら進めていく予定です。

（根市大樹氏）
　プロスポーツなども割と送迎があって、お金を持っている人は行きやすいんですけど、お金持っていない人はなかなか難しい。プロスポーツのヴァンラーレさんとか、ラインメールさんも、教室に通えないところもあるので、そういうところもちょっと何とかできればと思っています。

（こどもみらい課）
　まず、働き方改革ということで、お手元に配付した資料の中の働き方改革推進企業という資料をご覧ください。
　県では、仕事と子育てを両立するということで、柔軟な働き方ですね。やっぱり子どもさんが小さい時は早く帰れるような職場の環境づくりですとか、土曜日、日曜日は休めるようにとか、お子さんが出産される、あるいは出産された後にお父さんが育休を取ったり、お父さんも産休を取ったり、というような形が取れるようにということで、「あおもり働き方改革推進企業」を推進しています。
　これは、まず、宣言をしていただいて、その間にいろんな条件を満たしていただいて、推進企業という形で認証を受けるという仕組みになっています。
　これを推進することによって、企業としても職員ご本人もそうですし、お子さんや家族もそうですし、企業全体も幸せになって、そうしてその結果としては、青森県や社会全体、地域全体が幸せになるというような考え方で進めています。
　この認証を受けると、企業としても、例えば、県庁の入札に入りやすくなるとか、あるいは、銀行からお金を借りる時に低利の融資が受けられるとか、それから、東京などでやる就職の相談会や企業の合同説明会といった場に優先的に参加できるというようなメリットがあるということになっております。
　今現在、約２００弱の企業が宣言をしていまして、約１５０の企業が認証を取っておりまして、県としても、どんどんこれを進めていきたいと考えております。
　それから、送迎や子どもの預かりの時間のことがお話に出ていましたが、放課後児童クラブ、

小学校１年生から６年生までが対象になっていまして、基本的に終わりの時間が、現状は６時というところが一般的に多くなっています。町村によっては、それが６時半とか７時までというところもありますので、県としましても、各市町村に親御さんの希望に合わせて延長できないかということで働きかけを行っているところです。

それから、根市さんがいろいろ取り組まれている子ども食堂ですとか、子どもの居場所づくりの活動、非常に大事だというふうに考えていまして、県内でも、今、いろんなところで自主的にやられたり、あるいは社会福祉法人や学校法人で、空いているスペースがあるので、それを活用したいということで始めているところがあります。

近いところですと、十和田などで、バスを借り上げて運営したり、バスで県内を回ったりということで、キャラバンなどをしております。

県としましても、こういう子どもの居場所づくりや、子ども食堂をやりたいと言った時に、ノウハウのようなものや、スタッフを、どうしたらいいのかというようなこともあると思いますので、アドバイザーを派遣したりすることも行っておりますので、こういったことについて、疑問等がありましたら、当課にいつでも御相談いただきたいと思います。

また、子ども食堂でも食材費が上がっているということで、当課でも、回数には制限があるんですが、若干の補助制度も作っておりますので、またいろいろ御相談いただきたいと思います。

（青少年・男女共同参画課）

根市さんがお話された、地域の子ども、地域の大人と繋ぐ、あるいは地域で見守るというような取組については、平成１６年から、知事の強い思いの下で始まった「命を大切にする心を育む県民運動」というものを持続的に続けています。

その中で平成２９年からは、地域全体で子どもを見守る環境づくりということにより力を入れて進めており、お手元に配付しているこの「いのちつうしん」に取り組みの内容が凝縮されておりますので、そちらをお読みいただければと思います。

この中で、中学校、高校で生徒と地域の大人が命、あるいは思いやりについて語り合う「対話集会」をやっています。昨年度は、名川中学校で実施して、根市さんも地域の大人として参加していただき、ありがとうございました。

このような取組では、共働きなど、忙しい地域の方々も学校や子どものためなら、ひと肌脱いでくれるんだということを強く感じております。我々としては、特定のところに力を注いであげることはできませんけれども、このような機会を通じて得られた繋がりでいろいろと地域で子どもを守る取組をしていただきたいと思いますし、新たなことであれば、このパンフレットの７ページに地域との「絆づくり応援事業」ということで、私共の課で年間２団体をモデル事業として支援しておりますので、募集があった時は応募していただきたいと思います。更に、その地域の大人ということでいけば、青少年の健全育成を推進する青少年健全育成推進員を南部町を含め、県内で４００名ほどお願いしております。ただ、高齢化が進んでいて、困っているところもありますので、根市さんや田中さん、是非、推進員にもなって、地域の子どもの健全育成のためにお力添えしていただければと思います。

（生涯学習課）

根市さんから、地域や民間団体などが、体験や探究をテーマとして、子どもたちのこころの力

を伸ばせるような施策や事業を期待するというお話をいただきました。先ほど、佐藤美穂子さんにもお伝えしたんですけども、県教育委員会では、学校の教育活動とはまた別に高校生などの若者が地域で活躍する地域活動者と共に地域活動の企画実践を行う地域の想いをつなぐ若者育成事業の方を実施しております。

詳しくは、先ほど御説明しましたので割愛いたしますが、今後も各地域で活躍する地域活動者や地域活動団体と連携しながら、次代の地域を担う若者の育成に取り組んでいきたいと考えております。

（知事）

根市さんのパワーを益々、皆、この機会に頼んで。一生懸命、一緒にやっていこう。

（根市大樹氏）

ありがとうございます。頑張ります。

（西村裕子氏）

トリを務めさせていただきます。

大都会の階上町から参りました西村です。よろしくお願いします。

私自身のことを喋ると、１時間ぐらいかかってしまうので、ちょっと落書き状態で申し訳ないんですが、落書き帳を用意させていただきました。喋りきれないところは、この辺を見ていただいて、もしよければお友達になってください。

私は、皆さんとはちょっと違いまして、自営業とサラリーマンを兼業しております。

最初は、夫の実家が階上町で、結婚前に何回か来ていて、そのうちに田舎暮らしが流行っているという話があって、まさにその波に乗って、田舎暮らしがしたくて移住したタイプの町民です。

出身は宮城県でして、氷河期世代でしたので、就職で東京に行きまして、１５、６年ぐらい仕事をして、その時期にリーマンショックとかありまして、いろいろ煽りを食って、手取りも減りボーナスが無くなるかもみたいな状況になりました。

この辺の賃金と大して変わらないぐらいになってきそうな状況だったんです。だったら、住居費が、義理の実家がありましたので、経費が下がるだろうという目論見もあり、旦那さんにお願いして引っ越して来たというのが経緯です。

たまたま、その時に同時に妊娠もして、こちらに来てから産みました。階上町は、全然知らなかったんですけど、凄い手厚くて、保健福祉課に大変お世話になりまして、何も知らないところで妊娠中から里帰りから、保育園に入るまで、待機児童もゼロでしたので、すぐ仕事に復帰するような環境もできたということで、階上町様様ということです。

これもたまたま、保健師の方がいらっしゃって、その時に臨時職員を募集しているという話をしていて、パソコンを使える人が欲しいというので、私もちょっと、復帰がてらに軽く仕事ができるところが良かったんですよ、というので時間休も取れるというような職場で、そこで皆さんと仲良くなりまして、いろいろお力添えをいただいてきたという経緯もあります。

最初のうちは、臨時職員の後にフリーのデザイナーとしても、自営業を立ち上げまして、同時に大阪の会社とテレワークで、正社員契約で最初はやっていました。今、テレワークは当たり前になっていますけど、その当時は、まだ、そんなに普及していませんでした。その後は、地元企業で良い求人がありまして、そちらの方に転職して、現在の中小地元企業で働いて、デザインの方も兼業しているというような経緯があります。

ここからが本題といいますか、最初に皆様にお知らせさせていただいたとおり、ハローワークとインディードでめちゃくちゃ探したんですけども、休日の設定が１２０日というのが、全然なかったんですね。第２土曜だけ休みとか、土曜日は出勤という企業もある。東京の方だと土曜日は全部休み。有休もしっかり取らせるというのが、スタンダードになっているんですね。

今日は移住と子育てというテーマでしたので、そこに絞って喋らせていただくと、移住したいという人は、自営業をやりたいという人ばかりではないので、やっぱり企業がどれくらい給料を出して、お休みがもらえるかというところを見ているんですね。大体ハローワーク、インディードあたりを見て来るんですけど。青森県で、八戸市で調べると、まあ、大分頑張らないと出てこない。そういう状況が当たり前だと思われてしまうと、やっぱり移住者としては、食っていけないんじゃないかなと。自営業をやるにしても、皆が皆、起業、新規事業でできるわけでもなければ、事務員でやっていきたいという人だって、ほぼ、ほぼ占めているので、ちょっと第一次産業はな、っていう人もやっぱり多いんですね。

なので、その辺を改善していかないと、親側の地盤が固まらない。子育て以前の問題っていうふうになってきちゃうんじゃないかなと、私は大変危惧しております。

今の会社は、ちょっと融通を利かせていただいて、在宅ワークということで、土曜日、基本的には、お休みとしていただいているので、厳密には休みではないんですけど、妥協してもらっています。

これも、子育てに関するところなんですけど、私は、たまたま義理の実家が八戸にありますので、子どもが病気という時は、当日、お願いできるんですけども、移住してくる人は、実家、全然関係ない。御夫婦で来た場合は、実家がないんですね。

ファミサポさんも、あるのは知っていますが、病児保育はまず駄目ですし、何日か前に予約しなきゃいけない。現実的に利用するのが難しいというところがありまして、その辺、ちょっと、足かせになりやすいのかなと。今はとりあえず、有休を使って休まなきゃいけない。やっぱり流行病に罹ってしまうと、１週間ぐらい取られてしまうというようなこともあります。だったら東京の方の有料でもいいから預かってくれるところの方が、というふうになりかねないかなと、私は思っていました。

子育てと親の就業状況については、その辺がちょっと気がかりというところです。逆にそこさえクリアしてしまえば、凄く住みよい町、どこに行っても楽しい。私、田舎暮らしが好きで越してきたって言っていたんですけど、階上町に限らず、足があれば、東京に行くよりも安く、泊りがけでも凄い安いんですよ。今、旅行支援、やっていますが、仙台の方を、今、調べてみたら１万円以上なんですけど、この辺だと５千円以下というものも結構あるので、子育て世代にも現役世代にも優しい地域で、魅力的だなと思っています。地域の良さを活かしたイベントというのも、それぞれやってらっしゃいますが、単発、単発でやるものだから、なかなか被ってしまって行けないというのもあります。一次産業を生かしたイベントにしても、キッザニアのような就業体験みたいなイベント、何かもうちょっと集約したような感じのイベントなどをやってみるとか、分

散して、皆、何かテンデンバラバラにやっているのを何とかできればいいのかなというふうには、常々思っていました。

そういうところが改善できれば、より楽しいのかなと思いました。

町に来て食べ物が凄い美味しくて、私はデザイナー用の絵を描いていまして、青森のソールフードの白いご飯に筋子が乗っているのが、全県規模で何故か青森のソールフードになっていて面白かったので絵を描いたんですね。折角だから、Ｔシャツにして着ようと思って、Ｔシャツにしたんですよ。

私の好きな美味しいものばっかり描いていて、次、ジャガイモを蒸かしたやつにバターと塩辛を乗せたやつを描こうと思っているんですけど。

（知事）

青森の大好きな熱いご飯と筋子。筋子の量が、安いものですから、食べすぎるんですよね。

（西村裕子氏）

いちご煮やマグロのお寿司も美味しかったので、「マグロのおすす」って書いてあるような、何か変なＴシャツを着て。

今日着ているやつは、実は、「飯 食ぅさ あべ」と書いてあります。

そういう感じで、青森県、良いところ一杯あると思うので、是非、楽しんで暮らしていきたいと。

（知事）

最終結論で、良いところがいっぱい出てくれて嬉しいです。

ただ、子育ての場面とか、ＵＩＪターンの場面で課題、我々も感じていて、住宅は直せるんだけども、周辺の仲間づくりの応援の仕組みとか、なかなかというところがありまして、それぞれ担当課の方からお願いします。

（こどもみらい課）

働き方改革については、先ほどお話したとおりです。

それでは、お話のありました病児保育の件で、当日、申し込みできないかというお話がございました。

これについては、実際に八戸で２か所、病児保育をやっております。病後児保育をやっているのも３か所ほどございます。ただ、階上町には、今、ない状態なんですが。まず、病児保育については、やはり、子どもさんが急に病気になって、急にお仕事を休めないと。それから、さっき言ったようにインフルエンザとか、そういうふうな病気になると、丸々一週間休みになる。そうすると、なかなか大変だというのは、皆さんからもお話を聞いていますし、私もそういう経験をよくしました。

各市町村には、この病児保育については、１か所ずつ作ってくださいということでお願いをしてきております。

近くでいくと、三戸町さんは開設をしていますが、階上や五戸さんは、まだという状態です。

それから、病児保育の当日申し込みなんですが、これは、やはり病院の体制の問題があって、

職員の確保の問題があるので一概には言えないんですが。八戸市でやっているところに聞いてみたんですが、当日、病院に行って、病気が決まってからでないと行けないんですが、基本的には、子どもさんが多く来ていない状態であればお預かりできるということですので、それについては、そういう病児保育をやっているところに直接御相談していただきたいと思います。

県としては、基本的には、当日保育も準備できるようにということで指導はしていきますので、よろしくお願いします。

（知事）

こどもみらい課、いろいろな意味でやる気満々ですから。

（構造政策課）

西村さんからの御意見のとおり、農業、体験型学習の資源として活用していくことは、地域の活性化に繋がっていきますので、グリーン・ツーリズムという形で県では推進しております。

ここ、三八地域は、グリーン・ツーリズム、最も盛んな地域でして、例えば、果物を収穫して、フルーツパフェを作ったり、あるいは、特色のある農作業体験、それを用意した農家民宿、数多くございます。国内外から来ているんですが、特に海外からは、台湾からの教育旅行も受け入れしております。

今日お見えの佐藤さん、根市さんは、グリーン・ツーリズム、農家民宿で活躍されております。

こういった情報は、県のホームページに掲載しているほか、後ほど、提供させていただきますが、こういった「あおもりグリーン・ツーリズムガイドブック」というものに載せておりまして、あと、各市町村でも、そば打ち体験ですとか魚のつかみ取り、様々なイベントを開催しております。

先ほど、キッザニアの話もあったんですけど、なるべく効率的に回れるルートを整理して、情報発信していきたいと思っております。

あと、農家民宿の宿泊料、５，５００円割り引くキャンペーンを今、開催しておりまして、佐藤さんの「音水小屋」さんも参加しているんですけど、１泊２食付で１，５００円、小学生ですと１，０００円で泊れますので、非常にお得となっております。県内３３の農家民宿が参加しておりますので、是非こういったプランの活用も御検討いただければと思います。

（知事）

農家民泊は相当頑張って増やしたんですよ。達者村、特に津軽の方も、増やして、増やして。海外の中でも台湾の子どもたちが気に入ってくれて、どんどん来るようになって、もう、コロナでスコーン。

ただ、また今、再開できそうで、直行便がまた戻れば海外もですが、まず、国内誘致を戻しながらと思っています。青森は、いろんな体験メニューや、対応が細やかだということを、皆、相手方の学校も、子どもたちも含めて、言ってくれます。構造政策課が頑張ってくれていますが、青森のお父さん、お母さんって、最後に言ってくれるぐらい、皆、懐いてくれて。良い風土だと、私は思っています。その青森へようこそおいでくださいまして、ありがとうございました。

（三八地域県民局長）

私は津軽の出身で、こちらの方で仕事をするのは三十何年ぶりなんですけども、地域にこういう元気な人たちがいて安心したといいますか、これからも一緒になって頑張っていきたいなと思いました。

今日は本当にありがとうございました。

（知事）

本当にありがとうございました。

いただいた御意見や、提案いただいたもの、いろんな形で採用させていただいたりとか、あるいは、市町村の方に流させていただいたりとか、しっかりとやっていきたいと思います。

今日は本当に、改めて、Ｕターンの２人も含めてようこそ青森へと思っております。

ありがとうございます。